

シンポジウム 3

「IBD の治療の最前線、外科的治療戦略も含めて」

司会 金井 隆典（慶應義塾大学医学部消化器内科）

池内 浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患外科）

IBD の内科的治療は生物学的製剤を中心に治療法の選択肢が増加している。それに伴い UC では手術数は減少傾向である。ただ、緊急手術症例は減少していないとの報告もあり、治療薬を変更し内科的治療を継続するのか、手術を選択するのかは、重症・難治の UC では発癌リスクも含め、重要な課題である。一方、CD でも再手術率は減少しているとする報告が多くみられるが、長期経過例も増加しており、発癌症例や短腸症候群症例は増加している。IBD 症例患者が長期的に QOL を最適に維持するためには、内科・外科の連携が重要であり、各施設の取り組みを報告していただきたい。